

タイトル:平成 27(2015)年度 研究セミナー(第 16 回)

日程:平成 27 年 12 月 18 日(金)~20 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「”Caring Touch” :

香港のインドネシア人家事労働者の事例に見る親密性の労働とイスラーム的接触規範の対立」

小栗 宏太 (オハイオ大学修士課程修了)

今回の研究セミナーには、9 月の教育セミナーから引き続き連続で参加させていただきました。修士課程を修了し、これから博士課程に進学を考えている人間として、両方のセミナーに参加することで、両者の違いについて身をもって実感できたと考えています。

今回の研究セミナーでは、私の発表は最終日だったのですが、初日からとてもレベルの高い、密度の濃い発表と、それ以上に密度の濃いディスカッションが繰り返され、正直とても怖じ気づきました。豊富な資料を用いて細かな、それでいて重要な問題に焦点をあてて検証したすばらしい発表に、先生方や他の受講生から次々と厳しい質問がよせられるのを聞き、これが博士課程の怖さか、と実感しました。

ディスカッションの内容としては、教育セミナーの発表と比べ、研究内容はもちろんですが、実際に研究を行い博士論文を執筆する各段階における実技的な方法に焦点があたっていたように思います。たとえば、資料の転写の方法、聞き取り調査における注意点、実際に博士論文をひとつの論文としてまとめる過程、などなどです。分野や対象地域の違う研究についての事でしたが、とても参考になりました。

すでに博士課程で研究を積み重ねた他の受講生の方々が、そのような実技的な悩みを持ち、すでに現地調査や一次資料から集めた豊富な情報をもとに、それをどのようにまとめていくかについて考えている中、博士課程での新しい研究をこれからはじめていく私の発表は、それには遠く及ばないレベルであったと反省しています。教育セミナーで得られたフィードバックをもとにテーマを絞り、内容を深めることはできたと自分では感じていたのですが、今後どのようにデータ収集を行い、それをまとめていくか、という方法論的な部分については認識が甘かった、と感じています。他の受講生の方の最終日の感想の中で、発表者は博士論文の執筆計画について(そしてその中の研究セミナーでの発表の位置づけについて)具体的にまとめ、それを発表の中に盛り込むべきだ、という指摘がありましたが、まさにその通りであった、と思っています。なので今後、研究セミナーの受講を考えている博士課程(後期)の入り口あたりの学生の方には、テーマを深めることはもちろんのこと、方法論や実技的な部分についてもよく考え、発表に盛り込むことをおすすめします。

私の発表はそのような未熟なものでしたが、テーマと問題設定のおもしろさについては評価をしていただき、またディスカッションやその後の昼食時などに他の受講生や鳥山純子先生をはじめとした講師の先生方から今後調査をしていく上での注意すべき点などについて具体的な助言をいただくことができ、大変参考になりました。

最後に、私事になってしまいますが、本研究セミナーを修了し帰途についた車中で、ここ 1 年半ほど博士課程進学を目指して準備を進めていた大学からの不合格通知を受け取りました。不合格の理由は

「テーマはおもしろいが、具体的に調査をすすめられるのかについて疑問が残る」という、まさに私が研究セミナーで実感した自分の反省点そのものでした。

受講中には自分にはまだ早すぎたのではないか、場違いなところに来てしまったのではないか、と感じていたのですが、今ではもっと早く受講ができていたら、もっと早く自分の弱点に気づけていたら、と思えます。この研究セミナーは、私にとって、まだ博士課程進学前の未熟な身でありながら、博士の厳しさについて垣間見させていただくとても貴重な機会になりました。受講を認めていただき、そして暖かい指導・助言・励ましをしていただき、本当にありがとうございました。